

II. 調査演習 (2003~2015) : 質的調査演習を振り返って

II. Social Research Training (2003-2015): Looking Back on the Education of the Practicum in Qualitative Research

石井 和平

高根正昭氏の「創造の方法学」には、質的調査方法論について述べた以下のような文章がある。

「彼らはベンディックス教授がなんの講義を始めるかと、固唾を飲んで見守っている。あの学生達が、数量的データに限られた研究法の講座に、満足していないことは明らかであった。サーヴェイ・リサーチ以外の方法が、社会学部の講座でとりあげられないことに、彼らは絶望していたといってもよいかもしれない。彼らが質的方法の分野においても、数量的な方法に対応するような、より生産的な方法を求めていたことは明らかであった」

ここで述べているベンディックス教授とは、マックス・ヴェーバー研究で著名なラインハルト・ベンディックスのことを指している。およそ50年前の米国の大学の話とはいえ、量的調査方法に匹敵する質的調査方法への期待が高いことが伺える文章である。

さて、我が大学（社会情報学部）における質的調査実習関連の講義をここで振り返ってみることにしたい。

まず、2年生科目「社会調査基礎演習・質的調査方法論」では、質的調査について座学の講義を行ってきたが、実際に調査実習を行うことも多かった。また、新しい試みとしては、マルチメディアを活用した教育実践も

行った。DVDを利用し、調査の現場で撮影された動画を見ながらの講義は、フィールドワークの経験のない学生に対して、質的調査のイメージを掴ませることができたのではないかと。またインタビューに慣れるために教室内で行ったインタビュー練習も、効果を上げた。学生2人がペアを組み、お互いに5分程度のインタビューを行って質問することに段階的に慣れていく方法である。履修学生が多い時代、教室を埋めた学生たちが一斉に質問を始め、持ち時間が終了すると、立場を変えてまたインタビューが始まる光景は、なかなか壮観であった。また、大学の構内限定の調査実習も行った。ただ、生協や大学の忙しい職員に対してインタビューを行う学生も多く、調査公害的な問題も出現したのではないかと思う。この学内限定の調査であるが、最近は大学全体の学生数が減ったこともあり、昼休み以外の時間に構内でインタビュー可能な学生を探すことが難しくなっており、講義時間内で調査を完結させることはかなり難しい状況にある。

次に、3年生科目「質的調査設計・演習」では、2年生時の調査経験を基に、より専門的な実習を行うことを目的としている。

以下、図1に2003年度以降の各年度の質的調査設計・演習の担当者および対象テーマや地域をリストアップする。

私が担当した調査対象地は江別市内あるいは

2003年度：学校給食、観光ボランティア、高齢者の住環境（江別市、札幌市、奈井江町、美唄市）	小内
2004年度：商店街、食の安全、コミュニティFM、バリアフリー（江別市、札幌市）	小内
2005年度：副都心とまちづくり、育児支援（札幌市）	小内
2006年度：高齢者とまちづくり、大学と地域、商店街、市民活動（江別市）	小内
2007年度：大麻商店街（江別市）	石井
2008年度：江別小麦第1回（江別市）	石井
2009年度：江別小麦第2回（江別市）	石井
2010年度：南幌町の政策と生活（南幌町）	小内
2011年度：まちづくり、動物愛護、東日本大震災（江別市、南幌町、小樽市、札幌市）	小内
2012年度：札幌駅前通地下歩行空間（札幌市）	石井
2013年度：商店街（札幌市・小樽市・江別市）	石井
2014年度：地域社会での異文化理解と共生（江別市、札幌市）	小内
2015年度：地方、都市、郊外の生活課題（江別市、札幌市、歌志内市、小樽市、洞爺湖町）	小内

図1 質的調査・演習のテーマ

は札幌市内が多かったが、テーマについてはその都度変更した。大麻商店街については、2007年度に調査を行ったが、既に商店街の衰退が明らかであった。ただ、当時には存在していなかった、江別の大学生と地域を結びつけることを目的にした「COMMUNITY HUB 江別港」がオープンするなど、商店街の活性化に繋がる店舗も現在は登場している。機会があれば、商店街の定点観測を行いたいと考えている。

私の実施した調査の中で特に印象深いのは、札幌市の地下歩行空間内で行った調査実習である。厳密な質的調査とは言えない内容も含まれているが、街頭での通行人へのインタビューや歩行空間内で休憩を取っている利用者の観察等、多面的に利用状況の調査を行った。最初は通行人への声かけすら苦勞した学生も最後には熱心に調査を行ってくれたことは、今でも強く印象に残っている。総じて質的調査においては、代表性を担保できない限界があるが、地下歩行空間の利用状況を知るというテーマ故に、幅広い観点から調査

を行うことができた。2年生科目の課題で行ったライフストーリー調査も同様であるが、地下歩行空間の利用調査などは、質的調査実習の可能性を広げる意味でも、実践してよかったと考えている。

一方、調査を行う上での限界も露呈した。例えば、近隣の商店街研究を行ったとしても、商店街が抱える一般的な課題すら知らない学生も多い。経営学等の専門知識がない中での調査は、調査設計のプロセスや分析プロセスにおいて、かなりの制約になった。また履修学生は、社会学理論に関する基礎的知識も少ないため、事前に社会的背景に関する適切な知識を提供する必要もある。この問題に関しては、履修生が法学部と経済学部学生に分かれるようになった現在、むしろ深刻なものになってきている。

質的調査は、量的調査を行う前提として、仮説を構築する際の手助けとなる。また、作業仮説を立てるということは、記述的研究に、理論を組み入れることになる。さらに Grounded Theory Approach (GTA) のよう

に、構造化(因果関係の推定)を求めるメソッドを用いることによって、質的調査を問題解決のツールとして利用することが可能となる。質的調査実習では、リサーチクエスチョンを重視し、単なる記述的研究に留めないような取組みを、今後も続けていきたいと思う。

最初に引用した高根正昭氏の「創造の方法論」では、社会科学における方法論の重要性を以下のように述べている。やや長文ではあるが引用したい。

「考えてみれば今日までの日本の社会科学には、あまりにも外国の文献の翻訳や外国の研究の敷き写しが多かった。それはまるで自分で文章を書かずに、外国の文献を筆写する行為に似ていたのではないか。われわれはこの辺で敷き写しではない、自分自身の文章を書き始めなければならない。そして方法論はこのような自分自身の文章を書くための、必

要最低限のルールなのではないか。科学における知的創造とは結局、自由に抽象と経験の間の循環を行う知的活動のことなのであろう。そして知的創造のための方法とは、科学の基本原則に合致した広い意味での調査と研究を行うための、ルールに他ならないのである」

質的調査は量的調査と対峙するものではなく補完する関係にある。また調査それ自体は、自己目的化すべきものではなく、科学的な方法論に基づき課題解決に寄与すべきものである。質的調査の方法論を学ぶことは、我々の知的な営為活動を、さらに実りあるものにしていくことに他ならない。調査実習を通じて、学生が自らの知的創造をより良いものにすることができたとすれば、それは講義担当者として望外の喜びである。以上。